小説フレームアームズ・ガール
後日談「ただ大切な物の為に・前編」

1. 実験体001

ルクセリオ公国とグランザム帝国の、長きに渡って続けられた10年戦争が終結してから、1週間が過ぎた頃。
グランザム帝国の大臣たちによるカリン暗殺未遂事件やシルフィア洗脳未遂事件、その主犯格の大臣たちが根こそぎ逮捕された事が大々的に報じられ、世界中で大騒ぎになっている最中。
ルクセリオ公国の隣国の島国・・・ナナミの故郷でもあるジャパネス王国の首都・トウキョウ。
その屋敷において、1人の軍人の男性が大勢の大臣たちからの盛大な祝福を受けながら、昇進祝いの席に立っていた。
メイド服の女性が男性の軍服の胸元に、中佐階級を示すエンブレムを取り付ける。

彼こそがシオンやカリンと同様に、ジャパネス王国軍において英雄とまで呼ばれている絶対的な「エース」・・・カズマ・ワタナベである。

「カズマ・ワタナベ少佐。先のクーデター鎮圧の功績を称え、本日付けで貴様を中佐へと昇進させる。これからも貴様の働き、期待しているぞ？」
「はっ！！謹んで拝命致します！！コウゾウ・アキシノミヤ天皇大将軍様！！」

凛とした表情で、目の前にいるコウゾウと呼ばれた初老の男性に敬礼をするカズマ。
それと同時に周囲の者たちからの盛大な拍手が、より一層大きくなる。
だがコウゾウが軽く右手を上げると、まるで訓練されたかのような一糸乱れぬタイミングで、その盛大な拍手がピタッと鳴りやんだのだった。

「此度（こたび）の貴様の働きは誠に大義であった。朕（ちん）に歯向かおうなどと馬鹿げた事を企てた愚か者共を、貴様のお陰で全て根こそぎひっ捕らえる事が出来たのだからな。」
「はっ！！天皇大将軍様からの直々のお褒めの御言葉を承（うけたまわ）った事、私のような愚物には身に余る光栄に存じます！！」
「うむ。それにこれまでにも貴様は我が国において、実に多大な貢献をしてくれた。6年前の震災でも朕の命を救ってくれたという、何物にも代えがたい功績もある。」

6年前の震災・・・コウゾウのその言葉にカズマは思わず眉を顰（ひそ）めてしまう。
ナナミが家族も家も財産も全て失い、ルクセリオ公国に亡命するきっかけになった、あの凄まじい大地震と、それに伴って引き起こされた大津波。
ナナミだけではない。カズマもまた、あの震災で結婚したばかりの妻を亡くしてしまったのだ。

当時まだ准尉だったカズマは、上層部からの命令で懸命に救助活動を行っていた。
だが軍の上層部はカズマに対して、コウゾウら国家首脳の者たちを最優先に救助するよう命令。カズマは最愛の妻を自らの手で救助に向かう事が出来なかったのである。
そしてカズマの活躍によって、コウゾウら国家首脳の者たちは無事救助された。
だがカズマの代わりに救助活動に向かうはずだった部隊が、立て続けに発生した余震による大混乱によって発生した、命令の伝達不十分と二次災害のせいで救助に向かう事が出来ず、後日

カズマの妻は瓦礫の中で餓死した状態で発見されたのだ。
　この出来事はカズマの心に一生消えない深い傷と、後悔の念を生む事になってしまう。

　カズマも軍人である以上、上層部からの命令は絶対だ。
　貴様の妻の救助は他の者に任せ、貴様は天皇大将軍様の救助に向かえ・・・上層部にそう命令されれば私情を全て捨て、公正無私に任務をこなさなければならない。
　酷なように思えるだろうが、元より軍人とはそういう物なのだ。
　そういう物なのだが・・・それでもカズマは今でも思う。
　何故あの時、俺に妻の救助に行かせてくれなかったのか・・・何故俺の妻を助けてくれなかったのかと。

「貴様が我が国に残した数々の功績、それらに朕も報いねば天が許さぬという物よ。故に朕は貴様に褒美を用意する事にした。」

　コウゾウの言葉に、カズマはハッと我に返る。

「私に褒美・・・でございますか・・・？」
「うむ。必ず貴様も満足してくれるはずだ。」

　コウゾウの合図と同時に、メイド服の女性たちによって扉が開け放たれ・・・そこから現れたのは軍服を着た1人の少女だった。
　まるで人形のような凛とした、とても可憐で美しい長髪の少女。

「貴様に紹介しよう。我が国が極秘に研究していた強化人間の試作品・・・実験体001（ゼロゼロワン）だ。」
「きょ、強化人間！？実験体001！？」
「貴様の命令には全て従うよう命じてある。洗脳と記憶消去も実施済みだ。貴様の命令とあらばこの娘は、どんな事でも盲目的に従うだろう。」

　実験体001と呼ばれた少女はゆっくりとカズマの前に歩み寄り、敬礼する。
　だが突然の出来事に、カズマは驚きと戸惑いを隠せない。
　人体実験、洗脳、記憶消去・・・そのような非人道的な行為は、例え敵軍の捕虜が相手だったとしても、国際条約によって固く禁じられているはずだ。
　だからこそ10年戦争の最中、戦いを拒絶するスティレットを無理矢理洗脳して戦わせたヴィクターは、死後も「愚帝」として世界中の人々から汚名を着せられているのだ。
　なのにそれをこんな平然と、堂々と強化人間などと・・・。

「これからはこの娘に貴様の身の回りの世話を全てさせる。料理、掃除、洗濯、裁縫、全てがプロ級の腕前だ。それにこの娘には房中術も仕込んである。」
「ぼ、房中術（汗）！？」
「この可憐な容姿、美しい肢体だ。貴様の夜伽（よとぎ）の相手として実に申し分無いだろう？」

　この公衆の面前で、この人は何とんでもない事を口走っちゃってんの！？
　カズマは心の中でコウゾウにツッコミを入れたのだった。
　良い子の皆は房中術という単語をネットで検索するなよ！？
　いいか！？絶対に検索するなよ！？大事な事なので2回言ったからな！？

「貴様もあの震災で妻を失ってから、もう6年も経っているのだ。いい加減貴様もそろそろ身を固めるべきなのではないかと、朕は常々思っていたのだがな。」
「ちょ、ちょっと待って下さい天皇大将軍様！！！！彼女が強化人間って・・・それに洗脳や記憶消去とは・・・これらは全て重篤な国際条約違反なのでは無いでしょうか！？」
「実直な貴様ならそう言うと思っておったわ。だが朕はリーズヴェルト中尉を洗脳したヴィクターのような愚か者とは違うからな？」

戸惑うカズマの反論を、コウゾウが問答無用で黙らせる。
他の者たちは既に彼女の存在について知らされていたようだ。コウゾウの言葉に誰もが眉1つ動かさない。
いや・・・コウゾウに逆らえば国家反逆罪で処罰される・・・と言うべきなのか。

「この娘は6年前の震災で家族を全て失い、路頭に迷っていた所を朕が救い、士官学校で育てていたのだがな。震災のショックで重度の精神障害を患っていたが故に、あくまでも人道的な措置として洗脳と記憶消去を施したのだ。」

辛い事を思い出して毎日泣き叫んでいたから、全てを忘れさせて楽にしてやった・・・それがカズマに国際条約違反を指摘された事に対するコウゾウの反論なのだろうが。
だが、カズマを真っすぐに見据える実験体001・・・どこかで会ったような気がするのだが、カズマの気のせいだろうか。
記憶のどこかで、彼女の存在が引っ掛かっているのだが・・・どうしても思い出せない。

「しか・・・」
「まあそんな事はどうでもよい。貴様はコーネリア共和国軍のキサラギ少尉を知っておるか？」

さらに反論しようとするカズマを、コウゾウが話題を切り替える事で無理矢理黙らせたのだった。
これ以上の反論は許さんと・・・コウゾウがカズマに無言の圧力を掛ける。
カズマも軍人である以上、天皇大将軍が黙れと言うのであれば、黙るしかない。

「・・・は、元ルクセリオ公国騎士団のオペレーターの曹長で、先の10年戦争の後にコーネリア共和国に亡命した、ナナミ・キサラギ少尉ですね？」
「うむ。我が国の国民でありながらルクセリオ公国へと寝返り、さらにアルザード大尉の愛人の1人としてコーネリア共和国にも寝返りおった、魔性の女よ。」

このジャパネス王国においての震災の被害者という事もあり、直接的な面識は無いものの、カズマもナナミの事はよく知っていたのだが。

「近い内に行われる、コーネリア共和国への侵攻作戦・・・キサラギ少尉が前線に出て来る事も有り得るかもしれんな。だがかつての同胞が相手だろうと一切の容赦は許さんぞ。我らに歯向かうのであれば無慈悲なる天誅を与えよ。」
「・・・天皇大将軍様。本当にコーネリア共和国に戦争を仕掛けなさるおつもりなのですか？」
「無論だ。その際には貴様と実験体001にも戦場に出て貰うぞ。」
「は・・・。」

ルクセリオ公国とグランザム帝国・・・両国に多大な被害を残した、長きに渡る10年戦争がようやく終結を迎えたというのに・・・なのにまた、コウゾウは戦争を引き起こそうというのか。
しかもその動機というのが、魔法化学技術の技術提供を断られたから、力尽くで奪うという物だ。

コウゾウはこの件に関しては、あくまでも自らの正当性を主張している。
6年前の震災の際、ルクセリオ公国騎士団が戦争中にも関わらず軍を派遣し、ジャパネス王国への支援活動を行った。
その際にエミリアは、戦争中のルクセリオ公国に加担する形になってしまうからと、中立国である事を理由にジャパネス王国への支援活動を一切行わなかったのだ。
ルクセリオ公国騎士団が救助活動を行っている以上、わざわざコーネリア共和国軍を派遣しなくても大丈夫だろうと、エミリアが判断したというのもある。

だがコウゾウはこの件を人道に外れた非道な行為だと断じ、貴国らが支援活動を行わなかったせいで我が国に多大な損害が出た、その詫びとして魔法化学技術を提供しろなどとエミリアに圧力を掛け続けているのだ。
言ってる事は滅茶苦茶で支離滅裂しているのだが・・・そこまでしてでも魔法化学技術を手に入れたいと、心の底から思っているのだろう。
コウゾウに限った話ではなく、何かと滅茶苦茶な理由を付けてエミリアに魔法化学技術の提供を要求している国々は、世界中に数多く存在しているのだ。
魔法化学技術というのは・・・それ程までに強大かつ魅力的な代物なのだから。

「貴様と実験体001には、我が軍が開発中の新型フレームアーム・マガツキを与える。その力でもって貴様と実験体001はシオン・アルザードらを殲滅するのだ。」
「しかし天皇大将軍様。コーネリア共和国は中立国です。戦争を仕掛ければ我が国は、他国から厳しい非難を浴びせられる恐れもありますが・・・。」
「そんな物は最早形骸化しておるわ。現に奴らは10年戦争の際、二度もルクセリオ公国騎士団に加勢しているではないか。」
「ですが記録を見た限りでは、それはいずれも止むを得ない措置ではないかと、私は・・・」
「・・・ワタナベ中佐。貴様は朕に歯向かうつもりなのか？」

コウゾウに睨まれたカズマは、慌てて反論を止めて敬礼した。
言いたい事は山程あるが、これ以上は国家反逆罪に問われかねない。

「はっ！！ご無礼申し訳ありませんでした！！コウゾウ・アキシノミヤ天皇大将軍様！！」
「うむ。まあ実直な貴様だからこその、我が国を想うが故の朕への上申ではあろうがな。」
「私如きへの勿体無いお言葉、感謝の極みもありません！！」
「今回の戦（いくさ）は正義の戦である。奴らから魔法化学技術を奪取し、マナエネルギーの実用化に成功すれば、6年前の震災で多大な損害を受けた我が国の民たちを、大いに潤す事が出来るという物よ。」
「はっ！！心得ております！！」
「今回の戦はその為の戦・・・我が国の民を救う為の聖戦なのだ。その事を肝に銘じておくのだぞ？よいな？」

それでは我が軍が救助に向かえなかったせいで、全てを失ってしまったキサラギ少尉の立場はどうなるのですか・・・そう言いたくなるのをカズマは必死に堪えた。
重ねて言うがカズマは軍人だ。天皇大将軍たるコウゾウへの過度の意見は絶対に許されない。
カズマはコウゾウに敬礼しながらも、コウゾウにバレないように必死に歯を食いしばっていた。
心の中でナナミに対して、あの震災で救ってやる事が出来なかった事を詫びながら。

「戦の準備が整うまで、まだしばらく時間がかかる。先も申したように貴様の身の回りの世話は、

今後は全て実験体001にやらせる。貴様は実験体001の下で大いに英気を養うがよい。」
「はっ！！」
「実験体001よ。今後は常にワタナベ中佐の傍に付き、この者の心も身体も存分に癒してやるのだ。よいな？」

実験体001は人形のような可憐な、そして端正な容姿からは想像も出来ないような、とても力強い動作でコウゾウに敬礼をしたのだった。

「承知致しました！！崇高なる天皇大将軍様！！」
「うむ。朕からは以上だ。2人共下がってよいぞ？」

中佐への昇進祝いを終えたカズマは部屋を出て、ふうっ･･･と一息ついた。
そんなカズマの右腕を、実験体001が両腕でぎゅっと抱き締める。
カズマの右腕に直に伝わってくる、実験体001の柔らかな胸の感触。
この実験体001の一連の動作は、訓練によって仕込まれた房中術の一環なのだろう。
何の迷いも恥じらいも無く、実験体001はカズマに身体を密着させてくる。
と言うかむしろカズマの方が、実験体001の身体の感触と匂いにドキドキしてしまっていた。

「これからは私が、カズマ中佐の身の回りの世話を全てさせて頂きますね。遠慮せずに何なりとご用命下さいませ。」
「あ、ああ。よろしく頼むよ。ええと･･･。」
「私の事は001とでもお呼び下さい。カズマ中佐。」

恥ずかしがるカズマを、実験体001がとても潤んだ瞳で見つめていたのだった。

2. 奇妙な同居生活

かくして、カズマと実験体001との奇妙な同居生活が始まった。
コウゾウが絶賛するだけあって、実験体001の家事全般の腕は相当な物だった。
毎日出される料理は店に出しても通用するのではと思える程の絶品だし、カズマの自宅の一軒家は常に新築同様のピカピカの輝きを放ってるし、ある日ポロリと取れてしまったカズマの軍服のボタンも、彼女の凄まじい針捌きによって、あっという間に新品同様に修繕してしまったのだ。
それだけでなく人形のような可憐な容姿、そして美しい肢体だ。
それ故にご近所さんたちが次々と

「6年前に妻を亡くしたワタナベ中佐が、ようやく新しい妻でも娶（めと）ったのか。」
「畜生、あんな可愛らしい女の子がお前の新しい嫁だと！？リア充爆発しろ！！」
「よっしゃ、結婚式の準備は俺らに任せろ！！」

と騒ぎ出し、それに対してカズマが

「彼女はただの召使いです（泣）！！」

と必死に否定する事態にまでなってしまった。
ただ夜伽の相手に関してだけはカズマは必死に断っており、いつも別の部屋で寝て貰っているのだが。

幾らコウゾウが好きにしてもいい、夜伽の相手として存分に満足させてくれるはずだとカズマに告げたからと言って、そんな性欲を発散させる為だけに実験体001を抱くような破廉恥な真似は、カズマはどうしても躊躇(ためら)いを感じてしまうのだが・・・それだけではない。
カズマは心の中で、実験体001に対して警戒心、不信感を抱いているのだ。

コウゾウは実験体001の存在を、常日頃から自分に尽くしてくれるカズマに対する「褒美」だと断言していた。
だがその実態は恐らく、コウゾウが自分に送り込んだスパイ・・・カズマをそれを敏感に感じ取っていたのだ。

先の反コウゾウ一派にクーデターを起こされた件にしてもそうだが、不当な理由によるコーネリア共和国への侵攻命令、さらにはかつての同志であるナナミまでも、逆らうなら殺せと命じた事。
そして何よりも、6年前の震災で妻を救ってくれなかった事に関しての、コウゾウに対するカズマの不信感。それをコウゾウは敏感に感じ取ってしまったのだろう。
だからこうしてコウゾウは監視として、褒美という名目で実験体001をカズマの下に送り込んで来たのだ。

カズマがコウゾウの命令にこれからも忠実に従い続け、国の繁栄の為に貢献してくれるのであれば、それで良し。それならば実験体001の存在は、カズマに対しての本当の意味での「褒美」の意味を成すのだろう。
だが少しでもコウゾウに歯向かうような動きを見せれば、即座に拘束・・・場合によっては最悪その場で処刑せよと・・・実験体001はコウゾウから命じられているに違いない。
だからと言って実験体001を拘束・・・いや、ほんの少しでも危害を加えただけでも、それこそ実験体001に即座に軍に通報され、不当な暴力、虐待行為だとして逮捕される事になりかねない。
それこそコウゾウにとって、反逆者を排除する正当な口実が成り立ってしまうという訳だ。

だからこそカズマは実験体001を追い出すどころか、傷付ける事さえも許されない。
例えスパイだと分かっていても、これからも常に自分の傍に置き続けなければならないのだ。
全く、良く出来たカラクリだよ・・・ある日の夜、実験体001と一緒に夕食を食べながら、カズマは心の中でそんな事を考えていたのだが。
こうして自分の反対側の席に座り食事をする実験体001を見ていると、カズマはどうにも既視感を拭えないのだ。
俺はどこかで、彼女と会わなかっただろうか・・・と。
だが、どうしても思い出せない。彼女とはどこかで・・・どこかで会ったような気がするのだが・・・。

「・・・カズマ中佐？」
「はうあっ！？」

実験体001に呼びかけられて、カズマはハッを我に返ったのだった。

「・・・あ、えと・・・済まない、ちょっとボーッとしていたよ。」
「大丈夫ですか？少し顔色が悪いように見えたのですが・・・。」
「大丈夫だよ。本当にちょっと考え事をしていただけだから。」
「そうですか。今日の夕食がカズマ中佐のお口に合わなかったのかと・・・。」
「全然そんな事は無いよ。この里芋の煮っころがしなんか絶品じゃないか。」

いつも思うが、本当に実験体001の料理は絶品だ。これ程の素晴らしい料理を毎日口に出来る

なんて、本当に自分は恵まれていると思う。カズマはそれに関しては本気でそう思っていた。
　シオンはネバネバした食べ物は苦手だと公言しているが、この里芋の煮っころがしを食べても同じ事が言えるのかと問い詰めたい。小1時間程問い詰めたい。
　テレビの画面には先日起きたばかりの、グランザム帝国でのカリン暗殺未遂事件と、シルフィアの洗脳未遂事件に関しての特番が、事件が起きてから数日が過ぎた今になっても尚、大々的に報じられている。
　それ程までに、世界中において衝撃的な事件だったという事なのだろう。

「全く、酷い事を考える奴らもいるもんだよな。シルフィア皇女殿下を洗脳だなんてさ。」
「は・・・。」
「何でそんな残酷な事を平然とやろうとするのか・・・俺にはとても理解出来ないよ。」

　コウゾウは実験体001に洗脳、記憶消去措置を施したのは、あくまでも人道的な理由による物だとカズマに告げていた。
　震災で身寄りを全て亡くし、重度のPTSD（心的外傷後ストレス障害）を発症してしまったから、それを癒す為に全てを忘れさせて楽にしてやったのだと。
　確かに言っている事は理解出来るのだが、コウゾウの主張が押し通ってしまうのであれば、洗脳などの非人道的行為が世界中で一斉に正当化される事になってしまわないだろうか。カズマにはそれが一番の懸念だった。

　だが言葉には気を付けないといけない。下手にコウゾウを批判でもしようものなら、目の前の実験体001に密告される事にもなりかねないからだ。
　彼女は恐らくは、コウゾウがカズマの下に送り込んだスパイなのだから。

「御馳走様。とても美味しかったよ。」
「お粗末様でした。カズマ中佐。」

　カズマの称賛の言葉に、屈託の無い笑顔を見せる実験体001。
　この家に来たばかりの頃の実験体001は、洗脳や記憶消去をされた影響からなのか、まさに人形と言ってもいい程の、可憐ながらも感情の無い表情ばかりしていたのだが。
　カズマと共に過ごし、カズマの優しさに触れる内に、実験体001は少しずつではあるが、年頃の少女らしい笑顔をカズマに見せるようになりつつあった。
　鼻歌を交えながら食後の後片付けをする実験体001を、じっ・・・と見つめるカズマ。

　もしかしたらこの笑顔もカズマを安心、油断させる為の、コウゾウによって命じられた演技なのかもしれないが。
　いや、とても演技だとは思えない。これが演技だとしたら臭過ぎる。
　シルフィアのような達人クラスの読心術の使い手ならば、一目見ただけで演技かどうかを見抜いてしまうのだろうが、そんな高等技術など持ち合わせていないカズマには到底無理な話だった。
　いや・・・演技だとは思いたくない・・・というのが本音なのだろう。

　実験体001は洗脳や記憶消去をされた事で、過去の事を一切覚えていない。家族の事を何も知らない。友人もいない。それどころか過去の思い出さえも何も無いのだ。
　それでも思い出なら、これから俺と共に作っていけばいいんじゃないかと・・・最近のカズマはそんな事を考えるようになっていた。
　例え実験体001が、自らの下に送り込まれたスパイだと分かっていても。
　こんな可憐な少女が、ただコウゾウの命令に従うだけの兵器としてしか生きられないなど・・・そん

なの可哀想じゃないか。
　スパイならスパイで、それならそれで別に構わない。彼女がいつまでも自分の傍にいるというのであれば。

「ああそうだ。今までバタバタしていて、すっかり忘れてしまってたんだけど・・・君に渡したい物があったんだ。」

　立ち上がったカズマが鞄の中からネックレスを取り出し、実験体001に手渡した。
　翠（みどり）色の透き通った宝石の中に映し出されているのは、可憐な花が掛かれた紋章。
　呆気に取られた表情で、実験体001は手渡されたネックレスを見つめている。

「・・・これは・・・。」
「君が俺の所に来る前、コーネリア共和国まで観光旅行に行ったんだけどさ。城下町の商店街で売ってた安物のネックレスなんだけど、紋章のデザインが何となく気に入って、思わず衝動買いしちゃったんだ。」
「・・・・・。」
「いやいや本当に安物のネックレスだからね？全然大した物じゃないから。売店のおばちゃんが『アンタの大切な人へのプレゼントにしたらどうだい？』とか言ってたから、君にあげようと思ってさ。いつも俺の身の回りの世話をしてくれる君への、俺から礼だと思ってくれていいよ。」
「・・・カズマ中佐・・・。」

　何故か実験体001が潤んだ瞳で、顔を赤らめながら自分を見つめているような気がするのだが・・・気のせいだろうか。
　まあ他人からプレゼントを貰うだなんて、記憶を全て消された実験体001にとっては経験が無い事だろうから、戸惑っているのかもしれないが。
　取り敢えず喜んでくれているようだから別にいいかと、カズマは深く考えないようにした。

　だがこのカズマの何気ない行為が、この直後にとんでもない事態を招いてしまうという事を、今のカズマは全く知らなかったのであった・・・。

「それじゃ、お風呂に入ってくるよ。」
「・・・・・。」

　意気揚々と浴室へと向かうカズマを見つめる実験体001が、渡されたネックレスをぎゅっと両手で大切そうに抱き締める。

「・・・コーネリア共和国・・・百合の花の紋章・・・ネックレス・・・これをカズマ中佐が私に・・・！！」

　感極まった実験体001が、渡されたネックレスにそっ・・・と口付けをして・・・。

「・・・カズマ中佐ぁっ！！」

　カズマがいる浴室へと入っていったのであった・・・。

3. 君の名はホタル

いや、天皇大将軍様はさ、確かに彼女の事を「俺への褒美」だとか言ってたよ。
これからは俺の身の回りの世話を全てさせる、夜伽の相手もさせるとか言ってたけどさ。
いや、身の回りの世話に関しては本当に助かっていて、いつもありがたいと心の底から思ってるんだけど。
それでも夜伽に関しては断ってるんだけどさ。いつも俺とは別の部屋で寝て貰ってるんだけどさ。

「ご奉仕させて頂きますね、カズマ中佐・・・。」

大体俺への褒美だとか言ってたけど、彼女が俺の下に送り込まれたのは、天皇大将軍様の俺への監視が本当の理由なんだよね？彼女は天皇大将軍様が俺の下に送り込んだスパイなんだよね？
だからさ。もし俺が天皇大将軍様に対して不穏な動きをすれば、彼女は即座に天皇大将軍様に報告して、命令があれば俺を拘束、最悪殺すつもりなんだよね？

「ちゅっ・・・ちゅっ・・・んっ・・・カズマ中佐・・・あんっ・・・。」

いやいや、だからね。彼女が常に俺の傍にいてさ、俺から目を離そうとしないのは、あくまでも彼女が天皇大将軍様のスパイだからであって。
だけどそれが監視対象の俺にバレたらまずいから、いやいやこうしてバレちゃってるんだけど、俺への好感度を上げる為に、いつも美味しい料理とか作ってくれてるんだよね？
だからまず俺への警戒心を解かなきゃならない。俺の彼女への疑心暗鬼の心を消さなきゃならない。彼女がそう考えるのは、まあ分からなくもないんだよ。

「どうです？カズマ中佐・・・気持ちいいですか・・・？」

だからってさあ・・・幾ら何でもここまでするの（泣）！？

「いやいやいやいやいや何やってんの！？君は俺に何て事してくれちゃってんの（泣）！？」

カズマと一緒に湯船に入り、その美しい肢体、豊満な胸を惜しみなく晒しながら、カズマと唇を重ねながら右手で自らの左胸をカズマに揉ませる実験体001に、カズマは思い切りツッコミを入れたのだった・・・。

「何って、エッチです。」
「いやいやいやいやいやそういう事じゃなくて（泣）！！」

全く何の躊躇いもせずに物凄い発言をする実験体001に、カズマは戸惑いを隠せない。
これまでも実験体001はカズマとのエッチを求めて来た事があったのだが、それでもカズマは丁重に断り続け、実験体001も命令ならばと素直に身を引いていた。
それはあくまでも実験体001がコウゾウから与えられた「ワタナベ中佐の身も心も、貴様の房中術で癒してやれ」という「任務」による物で、さらには「ワタナベ中佐の命令には従え」とコウゾウから言われていたからであり、それ以上でもそれ以下でも無かったからだ。

だが今日の実験体001は、明らかに何かが違う。
とても潤んだ瞳でカズマを見つめ、もう離したくないと言わんばかりに、ぎゅっとカズマの身体を抱き締めているのだ。
カズマと共に過ごす内に、少しずつ年頃の女の子らしい表情を見せるようになっていた実験体001だったのだが、それは演技なんじゃないかとカズマは心の中で疑心暗鬼になっていた。
だが、こんな潤んだ瞳をする実験体001を見たのは、カズマはこれが初めてだったのだ。
自分の胸にダイレクトに押し当てられている実験体001の豊満な胸の感触に、ドキドキしてしまうカズマだったのだが・・・。

「だってカズマ中佐は、私にプロポーズをなさって下さったではありませんか。」
「は（泣）！？」

全く身に覚えの無い実験体001の発言に、カズマは呆気に取られてしまう。
プロポーズって。カズマがそんな事をした覚えなど一度も無いのだが。
それでも実験体001の潤んだ瞳が、それが事実であるという事をカズマに伝えていた。
一体全体何がどうしてこうなったのか・・・戸惑いを隠せないカズマに、実験体001がとんでもない事実を告げたのだった。

「カズマ中佐が私に下さった、あのネックレス・・・コーネリア共和国でご購入なされたとの事ですよね？」
「そ、そうだけど（泣）？」
「あの国において、あの紋章が描かれた装飾品を渡すという行為の意味を知っていますか？」
「な、何かな（泣）？」
「永遠の愛の誓いです。」
「売店のおばちゃああああああああああああああああああああああああああああああああん（泣）！！」

あのおばちゃんは俺に、一体何とんでもない代物をプレゼントに勧めてくれちゃってるの！？
心の中で盛大なツッコミを入れるカズマに、実験体001が再び唇を重ねた。
カズマへの一途な想いと愛に溢れた、カズマに精一杯尽くそうとする実験体001の、とても優しくて気持ちのいいキス。
それに加えて房中術を極めている実験体001だからこその、風俗嬢顔負けの圧巻の技術。
いやいやいやいやいやいやいやいや。

「き、き、君は、天皇大将軍様は俺への褒美だとか言ってたけど、本当は天皇大将軍様が俺の元に送り込んだ監視役なんだろう（泣）！？」

慌てて実験体001の両肩を掴み優しく引き離したカズマが、コウゾウへの反逆に問われる事を覚悟の上で、実験体001に問い詰めたのだが。

「はい、その通りです。」
「認めちゃっていいの（泣）！？」

あっさり認めてしまった。

「でも今はそんな事は関係ありません。私が今大切に想っているのはカズマ中佐だけ。天皇大将軍様の事など最早どうでもいいです。」
「そんな事言っちゃって本当にいいの（泣）！？」

「構いません。だってカズマ中佐は私の事を、いつもとても大切にして下さっていますから。」

とても潤んだ瞳、そして悲しげな笑顔で、カズマを見つめる実験体001。

「カズマ中佐は私の事を、最初からスパイではないかと疑っていたのでしょう？カズマ中佐が私に対して警戒心を抱いている・・・言動には気を配っている・・・それは私も感じていましたから。」
「そ、それは・・・。」
「それでもカズマ中佐は、私をスパイだと分かっていても、私の事を家族同然に扱って下さいました。私をそんな風に想って下さったのはカズマ中佐だけです。だから私は命令など関係無く、心からカズマ中佐と愛し合いたいと思ったんです。」

6年前の震災で家族を失い、洗脳され、記憶を消され、家事全般の技術や房中術までも叩き込まれ、カズマに対するスパイとして生きる事を余儀なくされた実験体001。
それでも尚カズマは、実験体001の事をスパイだと見抜きながらも、とても大切にしてくれた。
実験体001にとって、これ程嬉しい事は無い・・・それに加えてカズマが意図していなかったとはいえ、プロポーズ同然の行為までされたのだ。
何もかも失ってしまった実験体001が、ただ1人だけ自分に優しくしてくれたカズマに恋心を抱くのも、当然と言えるのかもしれないが。

「だからちゃんと責任取って下さいね。カズマ中佐。」
「ちょちょちょちょちょちょちょっと待ってくれ、001！！」

再びカズマと唇を重ねようとする実験体001を、慌ててカズマが制した。
そんなカズマに、実験体001がとても悲しそうな表情をする。

「どうして？私が天皇大将軍様から送り込まれたスパイだからですか？それともカズマ中佐は私の事を淫乱な娘だと、お嫌いになりましたか？それともやはり亡くなられた奥様の事を今も・・・。」
「いや、違うんだ、そういう訳じゃないんだ。俺は震災で亡くなったサクラの事を今も引きずってる訳じゃないんだよ。君の気持は嬉しいけど・・・その・・・。」
「その・・・何ですか？」

まさかこんな事態になるとは思ってもみなかったのだが、それでもカズマの心の中で、実験体001の存在が心の支えになりつつあったのは確かだ。
彼女が心の底から、本気で自分を愛してくれるというのであれば。
大体知らなかったとはいえ、実験体001に対してプロポーズと同等の行為までしてしまったのだ。その責任は男として、しっかりと取らなければならない。

「・・・やっぱりこういうのは男の俺の方からしないと、情けないと思うからさ。」

姿勢を正し、不安そうな実験体001の顔をじっ・・・と見据え、カズマははっきりと告げた。

「君がいつまでも俺の傍にいるというのであれば、これからも俺と共に歩んで欲しい・・・俺の妻になってくれ。001。」
「・・・カズマ中佐・・・嬉しいです！！」
「いや、001だなんて呼び方、幾ら何でも可哀想だよな。君にはちゃんとした名前を付けてあげないと・・・。」

記憶を全て消された実験体001の本当の名前など、今更知る事は出来ない。
恐らくはコウゾウの命令によって、実験体001の戸籍情報も全て抹消されてしまっているだろう。
だからこそ、せめてちゃんとした、実験体001に相応しい新しい名前を付けてあげようと、そうカズマは思ったのだ。
実験体001はこれからカズマと共に、第2の新しい人生を歩んでいくのだから。それに相応しい立派な名前を。

「・・・うーん、そうだな・・・。」

自分を見つめる実験体001の顔を睨めっこしながら、カズマはしばらく考え込んでいたのだが。

「・・・ホタル。」

ふと、カズマがそう呟いた。

「君も天皇大将軍様から聞かされてると思うんだけど、俺は6年前に震災で妻を亡くしたんだけど・・・実はその妻が妊娠していてさ、女の子が産まれて来るって事は分かっていたんだ。」
「・・・・・。」
「その産まれてくるはずだった娘に付ける予定だった名前だったんだけど・・・だ、駄目かな？」
「・・・ホタル・・・。」

ホタル。
夜中に淡い光を放つ、とても美しい幻想的な虫の名前。
ジャパネス王国も含めた他国では希少な存在なのだが、自然豊かなコーネリア共和国の森林地帯では数多く生息しており、コーネリア共和国においては国家指定の天然記念物に指定されており、国に許可を取らずに採取する事は固く禁じられている。
だがそれ故に他国では希少価値がとても高くなっており、売れば金になるからと密漁しようと企てる者たちが後を絶たないのだ。
そういう密猟者とコーネリア共和国軍との小競り合いが毎日のように繰り広げられ、天然記念物保存法違反と公務執行妨害の罪に問われ、逮捕者まで何人も出ているのが実情なのだ。

このホタルのような美しい女性になってくれればと願い、カズマが産まれてくるはずだった娘に付けるつもりだった名前だったのだが。
心の中で何度も復唱し、とても素敵な名前を与えて下さったと、ホタルは心の底から喜びを顕わにしたのだった。

「カズマ中佐ぁっ！！」
「アッー（泣）！！」

とても嬉しそうな表情で、カズマを抱き締め唇を重ねるホタル。
湯船の中で身を絡め合うカズマとホタルを、月の光が優しく包み込んでいたのだった。

4. 幸せの陰で

カズマがホタルと結ばれてから、5日目。
ジャパネス王国軍が兼ねてより開発していた新型フレームアーム・マガツキが、ようやく完成した。

カズマはマガツキの運用テストを兼ねたホタルとの模擬戦、そしてホタルを連れて城下町のパトロールと、城下町近辺の上空を忙しく飛び回っていたのだが。

パトロールを終えたカズマはホタルと共に役場を訪れ、洗脳と記憶消去の事は巧みに隠した上で、ホタルが事故で過去の記憶を全て失っており、身元が全く分からないという事にして、職員に事情を説明してホタルの新たな戸籍を作って欲しいと依頼した。
そして自分の妻として、正式に婚姻届を提出したいと職員に届け出たのである。
役場の職員は笑顔で快諾し、「ホタル・ワタナベ」という戸籍を暫定的に作成。同時に提出された婚姻届も受理され、ホタルは正式にカズマの妻となった。
とても嬉しそうな表情で、カズマと共に城へと帰還するホタル。

だが仕事を終えたカズマが、城門でホタルの帰りを待っている最中。
そのホタルがコウゾウの部屋で、カズマのこれまでの行動に対する定時連絡を行っていたのだった・・・。

「・・・以上の報告の通り本日もカズマ中佐に、天皇大将軍様に対する反逆の兆しは一切見受けられませんでした。」

カズマに対する満面の笑顔から一転して、無表情で直立不動のまま、淡々と目の前のコウゾウに報告するホタル。
コウゾウは椅子にどかっと腰を下ろし、そんなホタルをニヤニヤしながら見つめていたのだった。
カズマの正式な妻となったホタル・・・しかしコウゾウの前では実験体001としての、カズマに対するスパイとしての存在に戻ってしまっていた。
やはりホタルは、カズマを本気で愛してなどいなかったのか。カズマへの愛は嘘偽りの気持ちで、所詮は演技でしかなかったと言うのか。

自分が本当にカズマを愛していると、そう本気で思い込ませてカズマの警戒心を完全に解き、彼女は安全だとカズマに思い込ませた上で、警戒が緩くなったカズマへの監視を続行する・・・これはスパイとしての定石の行為ではあるのだが。
敢えて自らをスパイだとカズマに明かしたのも、カズマの警戒心を解く為のホタルの話術の一環なのだろうか。

「そうか。ワタナベ中佐は今日もボロを出さなかったか。」
「私の事を完全に信用させた上で、常日頃からカズマ中佐の傍で様子を見ていたのですが・・・天皇大将軍様への反逆の意志は、どうやら全く持ち合わせはいないようです。」
「うむ。奴の朕への忠義は、今の所は本物という事だな？」
「はい。」

とても満足そうな表情で、ホタルの報告を聞くコウゾウ。

「ただカズマ中佐は昨夜の私との夜伽の後、偉大なる天皇大将軍様に対して愚痴をこぼしておられましたが。その・・・『最近俺に対する人使いが荒い』などと。」
「よいよい。朕は寛大な男だ。その程度の愚痴ならば大目に見よう。はっはっは。」

ホタルからの報告に、コウゾウは余裕の態度で高笑いする。
カズマはとても有能な男だ。コウゾウもいけない事だと分かっていながらも、ついついカズマに頼り過ぎてしまう。

それ故にカズマがとても多忙になってしまった事で、ついコウゾウに対して愚痴りたくなってしまうのも無理も無いかもしれないが。
この程度の事で「反逆」などと騒いでしまうようでは、一国の王としての器量が疑問視されるという物だ。それ故にコウゾウも余裕の態度で、カズマの愚痴を寛大に許す事にした。
ただし。

「・・・ただし、もしワタナベ中佐が明らかな朕への反逆を企てたというのであれば・・・その時は分かっているな？実験体001よ。」
「はっ、即座にカズマ中佐を拘束、場合によっては即刻その場で処刑致します。」
「うむ。だが奴が我が国にとって必要不可欠な、有能な人材である事もまた事実だ。貴様は朕が奴の下に送り込んだスパイであると同時に、奴への褒美でもあるという事を忘れるな。」
「充分に承知致しております。」
「奴がこれからも朕に忠誠を誓い続けるというのであれば、それで良し。貴様は奴の妻としてこれからも誠心誠意、奴に尽し続けるのだぞ。よいな？」
「はっ！！」

ホタルはコウゾウがカズマの下に送り込んだスパイであると同時に、褒美でもある。
カズマの推測は、完全に当たっていたという訳だ。
それを分かった上でカズマは、ホタルを自らの生涯の伴侶にすると誓ったのだ。
そんなカズマの想いを知ってか知らずか、コウゾウは相変わらずニヤニヤしながら目の前のホタルを見据えていたのだが。

「それと朕がコーネリア共和国に送り込んだ諜報部隊からの報告によると、以前から予定していたスティレット・ダガーの一斉メンテナンスが、一週間後に行われる事が正式に決まったそうだ。」
「左様でございますか。」
「朕はこの絶好の機会を逃すつもりはない。奴らがスティレット・ダガーの一斉メンテナンスを開始した瞬間、コーネリア共和国に対して侵攻を開始する。貴様にも存分に働いて貰うからな？」
「はっ！！この命を懸けて、天皇大将軍様に戦果をもたらしてみせます！！」
「うむ。その為の切り札も用意してある。極秘に研究を進めていた強化人間たちの最終調整が、先程ようやく終わった所なのだがな。」

コウゾウに促されたメイド服の女性が一礼し、静かに扉を開け放つ。

「貴様には先に披露しておくとしようか。入れ。」
「「「「「「「「「「失礼致します。偉大なる天皇大将軍様。」」」」」」」」」」

そして軍服を着た10人もの少女たちが、一斉に部屋に入って来た。
まるで訓練されたかのような俊敏な動きで、綺麗に一列に整列し、寸分の狂いも無く同時にコウゾウに対して敬礼をする。
彼女たちもまたホタルと同様に6年前の震災で全てを失い、コウゾウに拾われて士官学校で育てられ・・・洗脳、記憶消去を施され、コウゾウの忠実なる下僕として生まれ変わった、強化人間の少女たちなのだ。

「紹介しよう。向かって左から実験体002から実験体011（ゼロワンワン）だ。貴様も仲間が増えて嬉しいか？実験体001よ。」
「いえ・・・。」
「この者たちにもマガツキを与え、今後貴様とは別動隊として働いて貰う。その実力は折り紙付き

だ。」

　彼女たちも恐らくはホタルと同じように、家事全般の技術や房中術も仕込まれているのだろう。
　戦闘要員としてマガツキを身に纏い最前線に出るだけではなく、スパイとして各国に送り込んでハニートラップを巧みに駆使し、各国の要人から秘匿情報を引き出す為の存在・・・といった所か。
　無表情で自分を見据える彼女たちを見たホタルが、瞬時にそれを悟ったのだった。

「ワタナベ中佐も、それにコーネリア共和国の連中も、どいつもこいつも朕の掌（てのひら）の上で踊らされているとも知らずに、哀れな物よのう。」
「は・・・。」
「今日の貴様とワタナベ中佐との模擬戦によって、貴様の実力と我が軍のマガツキの性能が十分に実証出来た。コーネリア共和国の連中が独占している魔法化学技術を、いよいよ我々が手に入れる日が訪れるのだ。」

　いかにヴァルファーレを纏ったシオンと言えども、彼女たち強化人間全員をまとめて相手にしては勝ち目は無いと・・・スティレット・ダガーが使えないコーネリア共和国軍など敵ではないと・・・コウゾウは確信に満ちた表情をしていた。
　密かにコーネリア共和国に送り込んだスパイたちからの定時連絡により、コーネリア共和国軍の情報は全てリアルタイムで把握しているのだ。
　そうとも知らず、呑気にスティレット・ダガーの一斉メンテナンスを始めようとするエミリアも、どこまでも馬鹿で愚かな女だと・・・コウゾウは完全に馬鹿にしていたのだった。

「では私はこれからカズマ中佐と共に帰宅する時間ですので、これで失礼致します。」

　ホタルが掛け時計に目をやると、時計の針は17時10分を回っていた。
　定時を10分程過ぎた所だった。

「うむ。これからも貴様の働き、大いに期待しておるぞ？」
「承知致しました！！偉大なる天皇大将軍様！！」

　コウゾウに敬礼をし、部屋を出ていくホタル。
　その後姿をコウゾウが、とてもニヤニヤしながら見据えていたのだが。

「・・・掌の上で踊らされている・・・か・・・。」

　部屋を後にしたホタルが、今もコウゾウと他の強化人間たちが話をしている最中、その扉の向こう側で静かにそう呟き・・・。

「・・・ふふふっ・・・。」

　思わず妖艶な笑みを浮かべたのだった。
　このホタルの笑みは、一体何を意味するのだろうか。
　そんなホタルの様子に気付く事も無いまま、周囲の城の関係者たちがホタルを素通りしていく。
　そして凛とした態度で城門に辿り着くと、自分を待っていたカズマを見かけた途端、とても嬉しそうに駆け寄ってきたのだった。

「カズマ中佐、お待たせしました！！」

とても爽やかな笑顔でカズマの右腕を両腕でぎゅっと抱き締め、とても嬉しそうにカズマに身を寄せるホタル。
そのホタルの笑顔からは、先程までの妖艶さは微塵も感じられない。
カズマもまた穏やかな笑顔で、自分の両腕を抱き締めるホタルを迎え入れる。
そんな2人のバカップルぶりを、周囲の兵士たちが和やかな表情で見つめていたのだった。

「遅かったねホタル。天皇大将軍様と何を話していたんだい？」
「マガツキの使い勝手はどうだったかとか、あとカズマ中佐が何か天皇大将軍様に対する愚痴を言ってなかったかとか、色々と聞かれました。」
「ぎくっ（泣）。」

思い切り心当たりがあるのだが、まあコウゾウの性格なら愚痴程度で自分を処罰したりはしないだろうと、カズマは特に気にも留めなかった。
そして恐らくは、自分がコウゾウに対して反逆の意志があるのかどうか・・・それをホタルに確かめていたのだろうと・・・カズマはそれを敏感に感じ取っていた。
それを全て承知した上で、カズマはホタルを妻に娶（めと）ったのだ。
ホタルがカズマにとっての褒美であると同時に、監視役でもある・・・その現実を全て受け入れた上で。

「それと諜報部隊からの情報で、スティレット・ダガーの一斉メンテナンスが、予定通り一週間後に行われるとの事です。」
「・・・そうか・・・一週間後か・・・。」
「はい、その時を狙って侵攻作戦を実施すると。」

最早コーネリア共和国との戦争は、避けられない所まで来てしまっているようだ。
コウゾウは魔法化学技術を喉から手が出る程欲しがっているようだが、今更あんな物に何の価値があるというのか。カズマはそれが疑問に思えて仕方が無かった。
6年前の震災からの復興が進み、今のジャパネス王国は魔法化学技術など最早必要が無い程までに、安定した国力を見せているというのに。

およそ言いがかりだと言ってもいい程の理不尽な言い分により、戦争を仕掛けてでも魔法化学技術を奪取しようと企てるコウゾウ。
魔法化学技術はとても素晴らしい代物だ。カズマもコーネリア共和国に観光旅行に行った際に少しだけ触れる機会があったのだが、確かにコウゾウが戦争を仕掛けてでも手に入れたくなる気持ちも、分からなくはない。
だが戦争を仕掛け、互いに多くの犠牲を出す事になったとしても・・・そこまでしてでも手に入れなければならない代物なのか。それがカズマにはどうしても理解出来なかった。
ルクセリオ公国とグランザム帝国・・・両軍に多大な犠牲を出した10年戦争がようやく終結し、終戦協定式も間近に迫っているというのに。

だがそれでも、カズマはジャパネス王国軍の軍人だ。
上層部が戦場に出て戦えと命じれば、嫌でも従わなければならない。
逆らう事は、絶対に許されないのだ。

「そんな事より早く帰りましょう、カズマ中佐。私たちの家に。」

そんなカズマの心情を察したのか、とても辛そうな表情をするカズマを、ホタルが悲しげな笑顔で見つめていたのだった。
カズマも我に返り、自分の腕にしがみついているホタルを見つめる。

「うん、そうだねホタル。俺はもう腹が減って死にそうだよ。」
「ふふふっ、今日の夕食は肉じゃがですよ。」
「肉じゃがか。それは楽しみだなぁ。」

いつもコウゾウにこき使われているカズマにとって、ホタルと共に過ごす日々は毎日の心のオアシスとなっている。
スパイだと分かっていても、それを承知の上で、カズマはホタルと共に生きると決めたのだ。
こんな平和な日々が、ずっと続けばいいのに。戦争など起きなければいいのに。
天皇大将軍様が考え直して、コーネリア共和国への侵略を思いとどまってくれないだろうかと。
そう心の中で何度も願いながら、カズマはホタルと共に帰路に就いたのだった。

5. 望まぬ侵略・・・それでも。

だがカズマのその願いは、無惨にも打ち砕かれてしまった。
一週間後・・・コウゾウの命令により、ジャパネス王国軍がコーネリア共和国城下町へと進軍開始。
多数の戦艦や輸送艦が空中から、戦車や護送車が地上から、そして潜水艦が水中から、コーネリア共和国の城下町を取り囲むように包囲網を展開。
それを迎え撃つコーネリア共和国軍側も、次々と迎撃部隊を出撃させる。

『進路クリア！！シオンさん、ナナミさん、発進どうぞ！！』
「シオン・アルザード、ヴァルファーレ、出る！！」
「ナナミ・キサラギ、フレズヴェルク・ダガー、出るわよ！！」

オペレーターを務めるスティレットからの合図で先陣を切るのは、ヴァルファーレを纏ったシオン、そして新型フレームアーム・フレズヴェルク・ダガーを身に纏ったナナミ。
そしてパワードスーツを纏った兵士たちやドラゴンライダー部隊、ペガサスライダー部隊らもシオンとナナミに続き、召喚士たちが次々と精霊魔法でサラマンダー、ウンディーネ、シルフら精霊たちを、精霊界から現世へと次々と召喚する。

だがその中にアイラやアーキテクトたち・・・コーネリア共和国軍の主力であるスティレット・ダガー部隊の姿は無かった・・・。
やはり諜報部隊からの情報通り、スティレット・ダガーは一斉メンテナンスの最中で使えない状況だというのか。
それを狙った上で、コウゾウは一斉にコーネリア共和国へと侵略を開始したのだが。

『誇り高きジャパネス王国軍の兵士たちよ！！総員朕に傾注せよ！！この戦いは我ら祖国に恵みをもたらす為の聖戦である！！』

ジャパネス王国軍の旗艦からコウゾウが、全部隊に対してオープンチャンネルで一斉に演説を開始した。
兵士たちの誰もが旗艦に対して一斉に敬礼し、コウゾウの言葉に一斉に耳を傾ける。

『6年前に我が国を襲った、有象無象の大震災・・・あれから6年が経過した今も、未だ我が国に深い傷跡を残しておる！！家族、友人、恋人・・・あの大震災で大切な存在を失った者たちは多かろう！！』

シオンの隣でナナミが、歯軋りしながらその演説に耳を傾けていたのだった。
あの日、私たちを助けてくれなかった人が、今更何を言っているのかと。

『だがあの日、コーネリア共和国軍の連中は、甚大な被害を及ぼした我が国に対し、支援活動を一切行わないという愚行に出た！！隣国のルクセリオ公国騎士団が我が国に対して支援活動を行ってくれたにも関わらず、奴らは愚かにも我らを見捨てると言う暴挙に出たのだ！！』

それは、コーネリア共和国が中立国だから。
10年戦争の真っ只中、ルクセリオ公国騎士団に手を貸して支援活動を行えば、グランザム帝国軍を敵に回す口実を作ってしまう事になってしまうからだ。
コーネリア共和国が中立国であり、10年戦争の際にルクセリオ公国騎士団にもグランザム帝国軍にも、どちらにも手を貸さないと公言していた以上、エミリアのこの判断は至極真っ当であると言えるのだが。

『ならば朕はせめて我が国を救う為、民を救う為、魔法化学技術だけでも提供しろとエミリアに要求し続けてきた！！だがそれでもエミリアは愚かにもそれを拒み続けてきた！！故に朕は奴らに対し、このような強硬手段を取らざるを得なくなってしまったのだ！！』

だがコウゾウはそれを口実にして、今回の侵略行為が正当な物であると主張しているのだ。
カズマとホタルもマガツキを身に纏い、旗艦のリニアカタパルトでコウゾウの演説に耳を傾けている。
国を救う為、民を救う為・・・コウゾウの言っている事は確かに立派ではある。
だがそれでも、こんな無意味な戦争を起こしてまで、魔法化学技術を手に入れる必要が今更あるのかと・・・カズマはそれがどうしても疑問に思えて仕方が無かった。

「・・・キサラギ少尉・・・前線に出て来たのか・・・オペレーターを務めていれば、君と戦わずに済んだ物を・・・！！」

戦場に姿を現したナナミの姿に、カズマはビームキャノンを握り締めながら歯軋りする。
カズマはジャパネス王国軍の軍人だ。上層部からの命令となれば、戦場に出て戦わなければならない。
例えそれが、かつての同志・・・ジャパネス王国の民であったナナミが相手だったとしてもだ。

『我が国を救う為、民を救う為の力・・・魔法化学技術を手に入れる為、これよりコーネリア共和国へと進軍を開始する！！あの裏切り者のキサラギ少尉もろとも、奴らを徹底的に叩きのめすのだ！！総員出撃せよ！！』

コウゾウの言葉と同時にジャパネス王国軍の兵士たちが雄叫びを上げ、一斉にコーネリア共和国の城下町へと出撃する。
迎え撃つコーネリア共和国軍。遂に両軍による壮絶な戦争が開始されたのだ。
後にジャパネス王国軍が大惨敗を喫する事になる・・・コウゾウの罪と愚かさが暴かれ、後世に語り継がれる事になる戦争・・・いや、コーネリア共和国軍による一方的な『制圧』が。

『リニアカタパルト接続、マガツキ全システムオールグリーン。発進シークエンスをワタナベ中佐に譲渡します。』

オペレーターからの通信と同時に、リニアカタパルトが起動。カズマとホタルの身体が宙に浮く。
今更どうあがいてもカズマの中佐という地位と立場では、最早この戦争は止められない。
下手にコウゾウに逆らえば抗命罪に問われ、自分が出撃しなかったせいで部隊に甚大な被害を及ぼしたとなれば、最悪銃殺刑にも問われかねないのだ。
ならばせめて、カズマの隣にいる大切な人を・・・ホタルを必ず守り抜くと・・・カズマはそれを心に誓ったのだった。

「ホタル。君は俺が必ず守るよ。」
「はい、私も身命を賭して貴方をお守り致します。カズマ中佐。」

カズマの呼びかけに、ホタルは力強い笑顔で応える。
今回カズマとホタルに与えられた任務は、強化人間たちで編成されたマガツキ部隊を城下町に突入させる為、その最大の障害となりうるシオンとナナミの迎撃だ。
両者共に、間違いなく「強敵」・・・厳しい戦いになるだろうが、それでもホタルを守る為に、カズマはここで負ける訳にはいかないのだ。

『進路クリア。ワタナベ中佐、001、発進どうぞ！！』
「了解した！！カズマ・ワタナベ、マガツキ、出るぞ！！」

オペレーターからの合図と共に、マガツキを纏ったカズマが戦場へと飛翔する。
その後姿をホタルは、神妙な表情で見つめていた。

「・・・カズマ中佐・・・。」

カズマにプレゼントされた首元のネックレスを、ホタルは右手で大切そうにぎゅっと握り締める。
この戦いで、全ての決着を付ける・・・その決意を胸に秘め・・・。

「ホタル・ワタナベ少尉、マガツキ、行きます！！」

決意に満ちた表情で、カズマの後を追って出撃したのだった。